

百名山登頂の思い出

No.1

1. 学生時代
 - (1)西原小学校 蓼科山(1)
 - (2)代々木中学校 谷川岳(2)
 - (3)千歳高校 甲武信岳、焼岳、天城山、黒岳、鷲羽岳、八ヶ岳、丹沢山、霧ヶ峰(10)
 - (4)慶應大学 鳳凰山、甲斐駒ヶ岳、千丈岳、北岳、間ノ岳、塩見岳、悪沢岳、赤石岳、聖岳、光岳
剣岳、立山、薬師岳、黒部五郎岳、笠ヶ岳
鹿島槍岳、五竜岳、白馬岳
利尻岳(29)
2. 日銀時代 十勝岳、
蔵王山、妙高山、巻機山
雲取山、乗鞍岳、草津白根山
宮ノ浦岳、石鎚山、大山(39)
3. 岡崎信用金庫時代 木曾駒ヶ岳、富士山、恵那山、御嶽、大台ヶ原山、大峰山、白山、荒島岳、燧岳、至仏山(49)
4. リタイア後
 - (1)日銀同期生 金峰山、瑞牆山、高妻山、那須岳、鳥海山、苗場山(55)
 - (2)仲間の合流 飯豊山、朝日岳、空木岳、常念岳、平ヶ岳、皇海山、魚沼駒ヶ岳(62)
 - (3)韓国人の山仲間 穂高岳、槍ヶ岳(64)
5. 女房との二人旅 開聞岳、霧島山、阿蘇山、祖母山、九重山
岩木山、八甲田山、八幡平、岩手山、早池峰
磐梯山、安達太良山、伊吹山、剣山、四阿山、美ヶ原
月山、会津駒ヶ岳、大菩薩岳、両神山、吾妻山
羅臼岳、斜里岳
大雪山、阿寒岳
トムラウシ、後志羊蹄山(91)
6. 単独行 筑波山、赤城山、男体山、武尊山、奥白根山、雨飾山
浅間山(98)
7. 百番目の山 幌尻岳、火打山(100)

深田久弥は「百の頂に百の喜びがある」として「日本百名山」を書いた。先般この百名山の登頂を終えることができ、私の山登りに一つの区切りがついた。この百の頂には私なりの百の思い出があるので、それを綴ってみた。

山登りを始めようと考えてクラブに入ったのは中学2年、13歳の時だから、今から60年以上も昔のこと。この60年間山登りを続けることができたのは3つの支えがあったからだと思う。

その第1は、山登りが好きだということ。自分たちで計画を立てる。地図を見ながら頭の中に仮想空間を作って歩いてみる。歩幅30センチで一步一步、頂上に着いた時はもうこれ以上苦しい登りはないとホッとすが、すぐに危険な下りが待ち受けている。この下りを乗り越えて駅にたどり着いた時こそ計画達成の喜びである。この喜びがあるから山登りが好きで60年間も続けられたものと思う。

ただ、エベレストで死んだマロリーは、エベレストに出発する直前に記者から「なぜ山に行くのですか」と聞かれ、「そこに山があるから」とそっけなく答えたという。スポーツとか趣味などは、なぜそれが好きかと聞かれてもいろいろな理屈を並べて説明しても相手に分かってもらうのは難しい。「好きなものは好きだ」と答える方が正確なのかもしれない。

私もつべこべ理屈をこねる前に、山が好きなのだ。この山登りを私に教えて下さった代々木中学校の登山部顧問の恩師に心から感謝している。

その2は、健康であること。学生時代に日本アルプスのほとんどの山を登ってしまった。その頃は体力に任せて、中部山岳地帯の高くてカッコいい山に登り続けていた。東北や九州の地味な山には目もくれない。日本百名山という本があることは承知していても、見向きもしなかった。

大学を卒業して、就職したのが日本銀行だった。銀行員はまとめて休みを取ることが難しい。家族のことも考えると、登山はさておいて目先の仕事に集中せざるを得ない。日本銀行にも山岳部というのがあって、私も入った。しかし、日銀山岳部は山登りやスキー旅行の計画を立て一般職員から参加者を募集して、引率することが任務。部員仲間だけの山行きは禁止されていなかったが、回数や行き先は知れていた。

したがって、百名山に限ってみると登頂した数は圧倒的にリタイア後が多い。私は65歳で常勤をやめ、70歳で非常勤も退いたが、この年齢でも山を歩ける健康な身体を保っていたことが百名山登頂達成の大きな要因である。

第3支えは仲間である。若い時には山岳部に入るなり、山岳会に所属すれば山仲間には欠くことはないが、転勤族が高齢になってから同レベルの山仲間を見つけることは容易ではない。

私は 52 歳で日銀を退職し、愛知県の岡崎に本拠を置く岡崎信用金庫に再就職したが、この時が山登りの危機だった。地縁も人縁もないところで同好の士を見つけ出すのには時間と幸運が必要だった。自己紹介をする機会があれば「山登りの好きな“山ダー”です」と PR に努めた。

少しずつ知り合いの輪が広がり、強い山仲間巡りに巡り合った。この人は百名山をとくに達成し、四国八十八か所めぐりの 1200km を 40 日で歩き通した。これを聞いて、私も日本百名山の登頂を達成して、山登りに一つの区切りをつけてやろうという気になった。

岡崎信用金庫は 65 歳で退任し生活の本拠を再び東京に戻したが、14 年間の岡崎生活の間に友人とは疎遠になり、新しい仲間を探さなければならなかった。その頃に山仲間になったのが、日銀の入行同期の 2 人である。入行同期生は 25 人いたがすでに 6 人が鬼籍に入っていた。残る 19 人のうち東京在住が 15 人。このうち 70 歳を過ぎても健康で山登りという趣味が共通しているのが私も含めて 3 人もいた。全く、極めて珍しいことだ。奇跡的とでもいえよう。今はこの 3 人で歩くことが多い。

単独登山は悪くないが、高齢化とともに危険度は高まる。一緒に山に行ってくれる友達は、何にでも代えがたい宝物である。

1. 学生時代

(1) 西原小学校 蓼科山(1)

1953 年、渋谷区の西原小学校の 5 年の時に林間学校という行事があり、これに参加した。行き先は蓼科高原。3~4 日滞在したうち 1 日が蓼科山登山に充てられた。何の問題意識もなく、ただ引率の先生の後をついて一日がかりで歩いたことくらいしか覚えていないが、これが百名山登頂の第 1 座であった。

山登りとは全く関連はないが、鮮明に覚えていることがある。当時の中央線は最後尾も普通の客車だったので連結器のうちは空けばなしだった。汽車が笹子トンネルに入ると、どこかのおじさんが我々に向かって「いいか、笹子トンネルは 1 里 10 丁まっすぐだ。だからトンネルに入ってから出るまで入口の光が見えるんだ」。今は最後尾の車両は車掌室になってしまっているが、それ以来笹子トンネルを通るたびにこの話を思い出す。

(2) 代々木中学校 谷川岳(2)

中学 2 年の 4 月に渋谷区の代々木中学に登山部ができた。前年に学芸大学の山岳部を卒業したばかりの先生が 1 年間の準備期間を経て登山部の創設に踏み切ったのである。この先生から山登りの面白さを教えられた。まさに恩師である。

2年生の最初の山行は丹沢のヤビツ峠。夏は北八ヶ岳の稲子だった。

3年の夏の合宿は谷川岳の武能清水で、先生の後輩の学芸大山岳部の学生が、天幕を持ってきて設営してくれて、薪拾い、たき火、飯盒炊さん等基本を教えてくれた。山登りの細かいことは覚えていないが、新しい世界が開かれたのである。

その後、天神尾根にロープウェイができてから天神尾根経由で谷川岳に登るようになったが、その都度武能清水の体験を思い出している。

(3)千歳高校 甲武信岳(3)

中学で登山の面白さを知って、千歳高校に入学すると迷わず山岳部に入部した。我々新入生の歓迎合宿は雁坂峠に幕営して甲武信岳往復。新品のザックに米軍放出の寝袋、キャラバンシューズも新しい。一方着るものは親父の着古したズボンにチョッキ。この時初めて石油のラジウスを使い、その威力に驚かされた。自分たちの力で山に登る初めての経験だった。その意味で甲武信岳は忘れられない。

焼岳(4)

1年の夏合宿は、有明温泉から合戦尾根を登り、表銀座を縦走する計画だった。ところが合戦尾根を登る時から雨。燕岳も大天井岳も良く覚えていない。雨がひどくて大天井岳で表銀座の縦走は断念、水俣乗越から上高地に下りることになった。槍ヶ岳に登れない悔しさより雨の山から下りる喜びの方が大きかった。

上高地についてみると人景がない。観光客は皆、大雨で道路が損壊したため帰ってしまったとのこと。我々は期せずして静かな上高地を味わうことができた。槍ヶ岳を断念した分日程に余裕ができたし、天候も好転したので山登りを再開した。一隊は超健脚の二人で上高地から奥穂高往復。もう一隊は、焼岳を往復したが、爆発する前だったので頂上まで行くことができた。

余談ながら、我々が帰る時も道路は開通せず、旧釜トンネルを歩いて下った。これも貴重な経験である。

天城山(5)

1年の春合宿は天城山に行った。修善寺経由天城峠から八丁池に入った。夏合宿は新人の女性の参加は止められていたが、春はOK。皆でモリアオガエルを探すなど、春休みののんびりした山歩きで、万三郎、万二郎に登って伊東の大室山に抜けた。大室山は春の山焼きの直後でまだ焼跡の状態。ススだらけの真っ黒な顔で汽車に乗った。今なら日帰り温泉に寄ってから帰るところだが、当時はまだ日帰り温泉はなかった。

黒岳、鷲羽岳(7)

2年生の夏合宿は、前年が北アルプスの表銀座だったので裏銀座にしたと思う。ブナ立尾根の登りや黒岳(水晶岳)で水晶を拾ったこと、雲の平の美しさ等断片的に覚えているが、その後も何度もこのあたりを歩いているので、いつ誰と行った時のことだか定かでない。

八ヶ岳(8)

伊勢湾台風の年のことだから、昭和34年高校2年の秋に間違いない。小淵沢から編笠、権現を経て赤岳に登った。

権現、赤岳と高度を上げるとともに眼下の樹林帯が見えてくるが、この様子がおかしい。一面に白い木が横たわっている。よくよく見てみると、これは風倒木。尾根全体、いや見える限りの樹木がすべて倒されていた。赤岳の頂上についてみると、頂上小屋はあとかたもない。伊勢湾台風の凄まじさを目の当たりにした。

当時すでにテレビは普及してニュースを見ていたが、台風の被害状況は特に大勢の方がなくなった伊勢湾岸が中心だったので、八ヶ岳まで大きな被害が及んでいるとは知らなかった。

丹沢山(9)

丹沢は千歳高校山岳部の時に最も慣れ親しんだ山である。しかし、それは丹沢山、塔ノ岳等の東丹沢をホームグラウンドにしていたにすぎない。丹沢山塊はもっと大きくて西の端は山中湖であると気付いた。

そこで、千歳高校山岳部のOB会が現役も入れて、全山縦走に挑戦した。コースは、山中湖畔の平野から歩き始め初日は山伏峠に幕営。あとは菰釣(こもつるし)山、畦ヶ丸、檜洞(ひのきぼら)丸、と歩いて蛭ヶ岳に着く。蛭ヶ岳からはホームグラウンドの丹沢山、塔ノ岳、大山に至る全山縦走だった。

実施時期は、西丹沢の水場の情報が乏しいので積雪をあてにできる3月だった。西丹沢は踏み跡がほとんどなく、夏用の天幕でよく頑張って歩き通したと思う。

千歳高校山岳部OB会では、50年以上たった今でも全山縦走を続けている。

霧ヶ峰(10)

高校1年の時だか2年の時だか定かでないが、父親の関係していた山の道具屋の秀岳荘でスキーを一式買ってもらった。昭和30年代の半ばのことなので木製の板を成型しただけの簡単なものだったがうれしかった。

これを試してみたくて、斜面が緩やかで初心者向きの霧ヶ峰に一人で出掛けた。仲間はまだスキーをやったことがない人ばかりなので、羨望の眼で見られるのを避けたかった。

(4)慶應大学

人並みに1年浪人して慶應大学商学部に入學した。山登りを続けるためには山岳部(KAC)に入るのがいいわけだが、山岳部に入ったら山登りばかりで慶應大学山岳部卒業になりかねない。慶應には会計学をやりたいと思って入學したのだから、やはりちゃんと商学部を卒業したい。そのためには山岳部ではなく、山登りのランクとしては落ちるが同好会レベルのアルペンクラブ(KUAC)に入った方が良からうという結論を出した。

南アルプス全山縦走 鳳凰山、甲斐駒ヶ岳、千丈岳、北岳、間ノ岳、塩見岳、悪沢岳、赤石岳、聖岳、光岳(20)

新人歓迎合宿は中央アルプスの千畳敷。まだロープウェイがなかったから駒ヶ根から千畳敷まで一日かけて歩いた。この時の体力が認められたのか、最初の夏合宿では最もきつそうな南アルプスの全山縦走のパーティーに組み込まれた。メンバーは3年生2人と、新人が都立高校の山岳部出身と小生の2人。合計4人だった。ルートは夜叉神峠から入って鳳凰三山を北に向かい、甲斐駒、千丈に登ったあと北岳。その後はとにかく南へ進んで光(てかり)岳から千頭に下りるというコース。概ね20日間だが、途中の荷揚げはなし。

ザックが重かった。自宅から新宿に行くまでに肩の血管が圧迫され、腕全体がしびれてくる。甲府までの夜行列車では眠れない。夜叉神トンネルの入り口から峠までの登りのきついこと。まさに地獄だった。南御室までの一日は小生の60年間の山登り人生で一番きつい一日だった。

途中、一日一日を乗り切ることで精一杯だったのだろう、名だたる山の姿かたちは覚えていない。最南部の聖(ひじり)岳にかかる頃から雲行きが怪しくなり台風が近づいていることを知った。それからはヤマヒルへの警戒より、早く下りることに夢中だった。2日分を1日で歩いて千頭に下りた時には雨はまだ降っていなかった。

千頭の温泉はおばあちゃんとの混浴風呂。人目構わず17日ぶりに垢を落とし、身ざれいになって電車に乗り込んだ。島田駅に着いたころから台風の雨が降り出した。

この合宿を何とか乗り切って、自分でも山登りの自信がついたように感じた。一方で南アルプス南部の印象は悪く、その後一度も出掛けていない。

北アルプス立山連峰 剣岳、立山、薬師岳、黒部五郎岳、笠ヶ岳(25)

2年生の夏合宿では北アルプスの立山連峰が割り当てられた。剣沢を中心にみっちり雪溪訓練を行ったうえで縦走に入り、笠ヶ岳まで歩く計画だった。小生としては2年生になって気持ちにゆとりができたし、前年の南アルプスの全山縦走で培った自信も大きかった。初めて足を踏み入れる薬師から、黒部五郎、三俣蓮華にかけての山並みも大きな山ではあるけれど、夏山を歩いている限り危険な山ではない。

その中で印象に残っているのは、笠ヶ岳の朝、東側の景色である。日の出をバックに槍、穂が真っ黒なシルエットで浮かびあがっていた。蝶、常念から見る穂高連峰も見事だが、笠からの眺望は忘れられない。

雲の平で完全停滞があった。好天と見渡す限りの山並みの中で、一日のんびりしたのも良い思い出である。

北アルプス馬蹄形縦走 鹿島槍岳、五竜岳、白馬岳(28)

3年生の夏合宿は長期間のうねトラブルもあって思いで深い合宿だ。コースは樺平から剣沢に入る。剣沢で定着したあと南に向かい、三俣蓮華からは後立山連峰を北に向かって歩き、白馬から蓮華温泉に下りる。我々は北アルプス馬蹄形縦走と呼んでいた。南アルプス全山縦走の反省から途中一か所に荷揚げしておいた。

最初のトラブルは山に入る前、宇奈月で起きた。トロッコ列車に乗ろうとしたら大雨のため運休。運休では如何ともしがたい。大雨の温泉街では天幕を張れるところもない。幸運にも公園の屋外演芸場の舞台には屋根がかかっていた。我々は躊躇なく舞台にグランドシートを敷いてゴロゴロと寝ることにした。天幕を濡らすことなく一夜を乗り切ることができた。

翌日もトロッコ列車は運休だったので、富山まで戻って通常ルートである電車とバスを乗り継いで室堂経由剣沢に入った。このルートは観光用で便利だが、交通費が高い。手持ち現金が気になったので、全員に自己申告して貰ったら、合宿を終わることができても全員が揃って東京に帰る金がない。知恵を出し合っても名案が出るはずもない。

この時小生は千歳高校山岳部の先輩が富山の气象台に勤務していることを思い出した。早速、一人富山に戻ってこの先輩に電話して会ってもらった。事情を説明して、1万円を拝借し、その場で母親に電話をかけてこの先輩宛に為替を組んでもらった。こうしてゲルピンは解決した。これは幸運としか言いようがない。

山歩きの方は、三俣蓮華までは前年歩いたコースでもあり順調に進んだ。

次のトラブルは後立山に入ってから水不足である。好天続きはうれしいが、

水場の乏しい稜線では水不足がきつい。烏帽子岳では、烏帽子タンボの水も少なくなり、かなり汚い。浮遊物を汗臭い手ぬぐいで濾してから炊事に使ったが、量的には不十分。翌日の行動中の飲み水は、リーダー管理としてオタマで少しずつ分け合った。

種池でも水がなくなったが、ここは沢を下れば水自体はたくさんあるので一斗缶で背負いあげた。

最終幕営地の蓮華温泉では、3週間を超す長い合宿を事故なく乗り切った喜びがわいてきた。それに、翌年は4年生なので就職活動に専念するため夏山合宿には参加しない。だから大学生としての夏山を無事に完了した喜びも加わって、感無量だった。

利尻岳(29)

千歳高校のクラスメートに親友と呼べる友達がいた。この男と北海道を貧乏旅行、いわゆるカニ族をしようということになった。交通費は東京発着、北海道の中はフリーパス、全部で5千円だったと思う。想定した大体のコースは、まず積丹半島を歩いてから、中央部の大雪を見たあと西海岸を北上して稚内に行く。稚内からはオホーツク海岸を南下して知床、十勝海岸を通過して襟裳岬。様似からは一気に上野まで帰るというもの。全日程は3週間。総費用の13,500円はなぜかはっきりと覚えている。

この貧乏旅行の中で、稚内から船で利尻島にわたり利尻岳に登った。鴛泊港で釣りをしている人から釣った魚をもらい、山登りのための栄養をつけた。

利尻岳は利尻山と表記されていることもあるが、深田久弥は「利尻岳」を使っている。標高は1700mとそれほど高い山ではないが、何しろ海岸から歩き始めるからネット1700mを登らなければならない。したがって相当きつい山、となっている。しかし、この時も、またこの数年後弟と二人で登った時もそれほどきついとは思わなかった。若かったというべきなのか、利尻岳と相性が良いのか。

いま思い出すと、青春のバカな男の貧乏旅行だった。